第九章　日本ノ最後總括提案ト會商ノ中止……三五三
日本總括提案……三五三
神戸會商ニ於テ和蘭船會社ノ提出セル基本問題ト之ニ纏ル紛糾……三六六
日本總括提案ニ對スル蘭側回答覺書……三七四
會商繰延宜言ニ關スル經緯……三七七
出發歸朝……三九二
第十章　會商ノ側面觀並雜感……四〇一
會商雰圍氣ノ轉化ト當代表部員ノ言動……四〇一
輸入取扱比率問題再檢討……四〇四
爪哇ノ實情……四〇六
日本人ニ對スル危惧ノ眞相……四〇九
蘭印ニ於ケル支那人……四一〇
蘭印ニ於ケル日本人……四一一

目次終

追懷錄續々編

第一章　日蘭會商帝國代表任命

「バタヴヰア」出張ノ經緯

筆者ハ外務省ニ就任以來殆ント政務又ハ法務ヲ取扱ヒ、通商事務ニ携ハツタコトハ頗ル稀ナアル。最近駐佛大使トシテ日本佛領印度支那條約ニ調印ハシタガ、之ハ筆者ノ赴任前既ニ栗山參事官其他ノ努力デ膳立ガ出來上ツテ居タノデアルカラ、只署名捺印シタト云フニ過キヌ。若シ强イテ求ムレハ明治四十三年カラ四十四年ニ掛ケ伯林デ行ハレタ日獨通商條約ノ改正談判ニ參加シタコトダガ是レモ談判ハ總テ珍田大使ガ自ラサレタノデ、筆者ハ書記官トシテ九個月間單ニ刀筆ノ事務ヲ執ツタニ過キヌ。故ニ筆者トシテ通商交渉ノ經驗

ハ甚タ少ナイガ、長年ノ外務省生活中、伯林ノ談判ヲ中心ニ相當會得シタ感ジモスルシ、一度ハ通商談判ノ衝ニ當ツテ見タイト思ツテ居タラ、昭和九年春廣田外相ヨリ日蘭會商ヲ引受ケヌカトノ内談カアツタノデ、三月三十一日之ヲ快諾シタ。筆者カ蘭印行ニ興味ヲ持ツタノハ、以上ノ外更ニ大ナル理由ガアル。夫レハ續編ニ書イタ通リ豫テ筆者ハ如何ニカシテ和蘭カ其南洋領ニ對シテ抱ク不安ノ念ヲ消解サセタイ希望ヲ有シ、義務的一般仲裁々判條約ノ締結サレタ時ニハ心カラ喜ンダ一人デアルガ、若シ幸ニ今回ノ機會ニ百尺竿頭更ニ一歩ヲ進メルトコガ出來、相俟ツテ通商事項モ圓滿ナ妥結ニ達シ、日蘭永年ノ親好ヲ愈々增進サセル結果ヲ贏チ得タラ、筆者カ外務省官吏トシテ最後ノ御奉公ト心得ル今回ノ蘭印行ハ、筆者ニ取リ此上ノ滿足ハナイノデアル。筆者カ斯クノ如キ考ヲ抱クニ至ツタ理由ハ、和蘭ノ首相デ、植民大臣ヲ兼ネテ居ル「コライン」氏ガ五月中旬蘭領印度訪問ノ豫定ダツタカラ、筆者トノ交渉相手ハ同氏デアルコトヲ前提トシテ、廣田外相モ筆者ニ蘭印行ヲ勸誘シ、筆者亦同一ノ見地カラ之ヲ快諾シタノデアル。從ツテ通商ニ關スル技術的事務ハ專門委員諸氏ニ一任シ、筆者ハ專ラ大局觀ニ基ツク要綱ヲ「コライン」氏ト協議決定スル腹デアリ、廣田外相亦同見デアツタコト、確信スル。

左記ハ同外相カラ四月四日在蘭武富公使ニ發シタ電報ノ一部デ、萬事之ニ依リ闡明シ得ルコト、思フ。

一、帝國政府ハ日本及蘭領東印度ノ間ニ永年存續シ來レル通商關係ヲ一層緊密ナル地歩ニ置クノ兩國親善ノ爲メ最モ望マシキ次等ニ鑑ミ、蘭國政府カ其一月八日附公文ヲ以テ提起セラレタル「バタヴヰヤ」ニ於ケル日蘭兩國政府會商ノ開催ニ同意ス。

二、「コライン」氏近ク蘭印ニ出張ノ趣ナルニ付テハ、我方ヨリハ長岡大使ヲ特派スルコトニ内定シ居ル次第ナルガ、果シテ「コ」氏ノ出張ハ御來示ノ通リ五月上旬實現シ得ルモノナリヤ、當方トシテハ會商ノ當初即チ少クトモ大綱決定ニ際シテハ「コ」氏ノ在印ヲ切望スルニ付當方準備ノ都合上「コ」氏ニ於テ五月末カ六月初ニ蘭印ニ到着スルコトヲ得ル樣取計ラヒ得ハ誠ニ好都合ト存スル處、右我方ノ希望ニ應シ得ル見込アリヤ御聞訊ノ上結果電報アリタシ。

三、前項ノ趣旨ニ依リ我方トシテハ大使ヲ代表トセントスル次第ニ付、蘭印側トシテ主席代表任命ニ付テハ、之ニ對應スル爲メ適當考慮アリタキ旨可然申入レラレタシ。

右ニ對スル武富公使ノ返電拔萃左ノ通リ。

「デ・グラーフ」外相ハ「コライン」氏ノ蘭印行ハ内政的ニ種々ノ經緯アルモ結局實行ト決定シ、身邊多忙ノ首相ナルヲ以テ五月三日海牙發飛行機ニテ往復シ、五月二十六日ニハ海牙歸着ト豫定シアリ、日蘭會商ノ爲メ右ノ豫定變更シ難キ事情ハ之ヲ諒トセラレタシト答ヘタルニ付、本使ハ我方ニテ特ニ大使ヲ煩シテ會商ヲ主宰セシメントスルハ、蘭國トテモ首席代表ノ任命ニハ特ニ留意セラレ、專門家乃至技術家ニアラサル大物ヲ派遣セラルヽコトヲ豫期スルカ爲メニシテ、双方斯クシテコソ今回ノ會商ヲ成功ニ導ク所以ナリト、然ルヘク說明ヲ加ヘタルニ、同大臣ハ長岡大使ノ出張ヲ喜フト共ニ我方ノ意嚮ハ之ヲ能ク了解シタル模樣ナリシニ付、會談ヲ一應打切リタリ。

尙ホ「コライン」氏ノ出張ニ付外務大臣ハ日蘭會商ノ爲メノ出張ニハアラサルモ、其頃若シ會商行ハルヽ

コトヽモナラハ便利ナルヘシト會商督促ヲ兼ネテ申出テ居リ、又會商中少クトモ其當初丈ケニテモ「コ」氏ノ在印ハ望マシキ次第ト考ヘラルヽニ付、若シ我方ノ準備整フニ於テハ五月中旬ニ會商ヲ開始スルコトセラレテハ如何カト存ス。

廣田外相ハ更ニ折返シテ左ノ電報ヲ武富公使ニ發シタ。

「コライン」首相ノ蘭印行繰下ノ不可能ナル事情ハ貴電ニテ諒承スルモ、折角會商直前ニ渡印セラルヽコトニモアリ、前電ノ趣旨ニヨリ是非長岡大使トノ會見方希望セラルヽ次第ナルガ、御來示ノ日程ニテ「コ」氏ニ會見スル爲メニハ本月二十九日出帆「アラビヤ」丸（新嘉坡乘換ニテ「バタヴヰヤ」五月十三日着）ニ乘船セサル可ラサルコトヽナリ、右ハ諸般準備ノ關係上殆ント不可能ノコトニ有之、若シ次船箱崎丸（五月三日出帆）ヲ利用シ得ハ五月二十日「バタヴヰヤ」ニ到着出來得ル筈ニテ、之ニハ何トカ繰合セ得ル見込アルニ付、御來示ノ次第ハアルモ右ノ事情御含ノ上「コライン」氏ノ蘭印出發ヲ一週間丈ケ繰下ケ方再應御交渉相成結果電報アリタシ。

右我方ノ要望再度申入ノ際蘭國外相ハ武富公使ニ對シ、左記要領ノ應答ヲシタ。

四月十一日外務大臣ヲ往訪シ、先ツ我政府ニテハ「コライン」植相ノ蘭印滯在中長岡首席全權トノ會見ヲ切望シ、五月三日本邦發、二十日「バタヴヰヤ」着ノ便船ニテ全權一行ヲ派遣スル樣繰合セノ見込ナルカ何トカ植相ノ滯在期間延長方御配慮ノ餘地ナカルヘキヤト申出タル處、大臣ハ夫ニハ昨今急ニ甚タ殘念ナル事情生シツヽアリテ（閣僚中ノ一名病狀思ハシカラサル由內話シタリ）實ハ植相兼首相ノ出張モ取止メトナルヤモ計ラレサル事トナリ居リ、素ヨリ未タ取止メト確定シタル次第ニ非ス、且ツ以上ノ事情ハ未タ公表出來サル事ナガラ、熱心ナル「コ」氏ガ初メノ計畫通リ豫定期日ニ出發スルコトヽナリテモ、此前ニ說明ノ通リ五月二十六日ニハ首相トシテ是非トモ歸着ヲ要スル議會關係ノ事情アリテ、蘭印滯在期間ノ延長ハ到底見込ナシ、貴國政府ノ御意響切ナルモノアルハ再應承ハリテ充分了解スルモ、此件丈ハ首相トシテノ內政關係ナルニ付如何トモ致難キ事情アリト答ヘタルニ付、本使ハ右ハ殘念ナル成行ニシテ或ハ日本政府ニ多少失望ヲ與フルヤモ計ラレサルモ、我政府ノ意響ハ篤ト植相ニモ御傳ヘアル樣致度シトテ話ヲ打切リタリ。

『コライン』首相ノ『バタヴヰヤ』出張中止

「デ・グラーフ」外相ノ內話ハ不幸ニシテ實現シ、四月十八日「コライン」首相ハ植民大臣ノ外經濟大臣ヲモ兼攝スルコトヽナリ、即日同氏ノ蘭印出張中止ノ旨公表サレタ。此情報ニ接シタ廣田外相ハ直ニ左記電報ヲ武富公使ニ送ツタ。

「コライン」首相ノ蘭印出張中止ハ寔ニ遺憾トスル所ナルガ、帝國政府トシテハ右ニ拘ラス前電申進置ノ通リ長岡大使ヲ遲クトモ五月中旬頃迄ニ出發セシメタキ所存ナリ、同大使ハ「バタヴヰヤ」出張ノ機會ニ兩國ノ感情ヲ一層好轉セシムル樣盡力スル筈ニテ旁々、屢々總督ト會見セシメタキニ付、貴官ハ右帝國政府ノ意響ヲ念ノ爲メ貴任國政府ヘ申入レラルヽト共ニ、同國政府ヨリ蘭印政府ニ傳達セシメ置ク樣御取計

相成度シ。

之ニ對スル蘭外相ノ應答左ノ通リ。

四月二十三日外務大臣ヲ往訪シ、帝國政府ニ於テハ長岡大使蘭印出張ノ機會ニ、兩國ノ感情好轉ト理解ノ增進ヲ計リタキ趣旨ヲ以テ、大使ト蘭印總督ノ會見屢々行ハルヽコトヲ希望シ居ルニ付、右ノ次第ハ本國政府ヨリ蘭印總督ニ傳達セラレタシト申入レタル處、同大臣ハ右ハ申ス迄モ無キ當然ノコトナルガ、念ノ爲メ總督ニ申送ルヘシト約シタリ。尙ホ其際大臣ハ首席代表トシテハ貴官ヨリ過日申出モアリ適當ノ人物ヲ本國ヨリ派遣方物色シタルモ、遂ニ其人ヲ得サルハ遺憾ナルガ、多分蘭印評議會副議長「ランネフト」氏首席代表タルヘク、同人ハ副總督ノ地位ニアル人物ナルニ付、日本側トノ接觸ニハ好都合ナルヘシト內話シタリ。

斯クノ如キ成行ハ我々ノ毫頭モ豫期シテ居ナカツタ事デ誠ニ殘念千萬デアル。一層思ヒ切ツテ此時會商地ヲ海牙ニ移シタ方ガ良カツタノデアロウガ、當時ノ空氣ハ左樣ニ動イテ居ナカツタ、是ヨリ先海牙ニスルナラ東京デト云フ意見ガアリ、貿易ノ現狀カラ見テ之ニハ相當ノ理由ガアルカラ、妥協ノ末「バタヴヰヤ」ニ纏マツタ經緯上、今更ラ海牙ニ持ツテ行ク氣ガ起ラヌノハ至極自然デ、又蘭印總督ノ權限ニ付テモ我々ニ錯覺ガアツタ、我々ハ總督ハ最高ノ行政官デ、蘭印ニ關スル萬般ノ政務ヲ主宰シ得ルモノト考ヘテ居タノデアル若シ此時總督ハ和蘭元首ノ名代デ對外交涉ノ主體ト成リ得ヌト云フコトガ判明シテ居タラ、ソシテ蘭印經濟省ハ「ジヤヴア」政商ノ傀儡ニ過ギヌトノ眞相ガ明晰ニ通報サレテ居タラ、政商ノ掣肘圈內デ無能力ナ總督

ヲ目標トシテ會商地ヲ定ムルガ如キ愚ハ決シテシナカツタデアロウ、此研究ヲ忽セニシタ筆者ハ不明ノ罪ヲ萬謝シテモ尙ホ足リヌコトヲ自覺スル。

帝國政府ノ訓令

日蘭會商ハ六月四日カラ「バタヴヰヤ」デ開カレルコトニ纏マツタノデ、筆者ハ昭和九年五月十七日代表部諸員ト共ニ東京ヲ出發シ、六月三日「バタヴヰヤ」ニ到着シタ、此時携行シタ訓令ハ左ノ如キ簡單且ツ廣汎ナモノデ、政府ハ筆者ニ自由裁量ノ餘地ヲ充分ニ與ヘタノデアル。

一、蘭印側ノ執レル各種制限措置ノ緩和ヲ要求スルト共ニ、將來此種措置ニ出ツルコトヲ抑制スルノ方法ヲ講スルコト。

右ノ爲メ必要アラバ、帝國政府ニ於テ適宜本邦關係業者ヲ統制スルコト。

二、出來得ル限リ蘭印產品ノ本邦輸入增加ヲ策スルコト。

右ハ成ルヘク當業者ノ自發的行爲ニ依ラシムルモ、必要アラハ帝國政府トシテモ本邦關係業者ニ對スル統制又ハ關稅引下等ノ措置ニヨリ協力スルコト。

三、蘭印ニ於テ和蘭國ニ對スル優先割當ヲ設定スルコトハ認ムルモ、兩者間ニ於ケル特惠關稅ノ設定ハ認メサル樣努ムルコト。

筆者ノ腹案

此訓令以外ニ無論詳細ニ亙ル交渉方針ノ列記ガアルガ、之ハ關係各省ノ協議會デ決定シタモノデ、交渉ノ成行ニ應シ伸縮性ノアルモノダカラ、單ニ專門委員ニ授クル指針ト見ルベキデ、從ツテ其內容ハ之ヲ揭ケヌ。

筆者携行ノ訓令ハ正式ノモノトシテハ前揭以外ニハ無イガ、會商ニ臨ム筆者ノ氣分ハ曩ニ記シタ通リテアルカラ、筆者ハ愼重立案ノ上、廣田外相ニ之ヲ示シテ其同意ヲ得、外務次官初メ關係局長亦異存ガナイノデ、更ニ齋藤首相ノ意嚮ヲ確メ、之ヲ基調トシテ會商ニ臨ムニ決シタ、此案ハ左ノ通リデアル。

聲明案

日蘭兩國間ニ永年間存在スル善隣友好ノ誼ヲ更ニ緊密ナラシメムカ爲メニハ、日本國ト蘭領印度トノ經濟的聯繫ヲ愈々密接ニスルニ在ルヲ思ヒ、下名ハ各々日蘭兩國政府ヲ代表シ、左記ノ聲明ヲ爲ス。

一、和蘭國カ其太平洋所領ヲ自國生產品輸入ノ爲メニ保留スルハ其固有ノ權利ニ屬スト雖モ、之ヲ行使スルニ當リテハ、常ニ各般ノ事情ニ充分ノ考量ヲ加ヘ、殊ニ和蘭國ノ生產力ヲ基準トシ、合理且ツ適正ノ處置ヲ執ルヘキコトヲ聲明ス。

二、日本國ト蘭領印度トノ間ノ經濟關係ヲ益々進展セシムルガ爲メニハ、出來得ル限リ双方貿易ノ健全ナル進展、增加及均衡ヲ計リ、又當業者相互ノ利害ヲ調節スルノ必要ヲ認メ、之ガ具體化及改善ニ付時々協議ヲ遂クヘク、貿易ノ均衡ハ必スシモ輸出入ノ均衡ノミヲ意味スルモノニ非ス、又双方當業者ノ利益ハ衡平ニ保護セラルヘク、殊ニ既得諸權利ハ完全ニ尊重セラルヘキモノナルコトヲ玆ニ聲明ス。

三、日本國及蘭領印度ハ相互ニ企業ノ自由ヲ保障スルコトガ、其經濟的聯繫ヲ助長スル所以ナルヲ思ヒ、工業、海運、水產其他ニ關シ、此目的ニ副フ協定ニ到達スル爲メ、隔意ナキ協議ヲ遂クヘキコトヲ聲明ス

書翰案

往信

太平洋方面ニ於ケル和蘭國ノ島嶼タル屬地ニ關スル同國ノ權利ヲ尊重スル日本國ノ固キ決意ヲ表示スル爲一九二二年二月五日和蘭國政府ニ對シテ爲シタル日本國政府ノ聲明ヲ想起シ、余ハ玆ニ右屬地ノ領土尊重ハ日本國ノ一貫セル政策ナルコトヲ此機會ニ日本國政府ノ名ニ於テ閣下ニ確言スルノ光榮ヲ有ス。

余カ此聲明ヲ爲ス所以ハ、之ニ因リテ永年間兩國ノ間ニ存在スル善隣友好ノ誼ガ愈々緊密ヲ加ヘンコトヲ希フト同時ニ、和蘭國ノ太平洋所領ニ對シテ日本國ノ有スル關心ハ、單ニ商工業、航海關係ニ在ルノミニシテ、其進展ニ依リ蘭領印度土民ノ福祉ヲ益々增進スルト共ニ、蘭領印度全般ノ繁榮ヲ招徠センコトヲ希ヒ、共存共榮ノ實ヲ擧ケント欲スルニ外ナラサルコトヲ闡明セント欲ルスニ在リ。

返信

本日附貴翰ヲ以テ曾テ一九二二年二月五日駐蘭日本國公使ヲ經テ和蘭國政府ニ爲サレタル聲明ニ關聯シ、閣下ヨリ蘭領印度ノ領土尊重ハ日本國ノ一貫セル政策ナルコトヲ確言セラルヽト同時ニ、日本國カ蘭領印度ニ對シテ有スル關心ハ、單ニ商工業、航海關係ニアルノミナル旨通告セラレ、大ナル滿足ヲ以テ余ハ之ヲ諒承セリ。

和蘭國政府モ亦右ト同一ノ精神ニ則リ、蘭領印度ニ於テ日本國ノ安全ニ脅威ヲ及ホス虞アル如何ナル措置ヲモ爲サヾルベク、又第三國ヲシテ之ヲ爲サシメサルヘキコトヲ確言スルト同時ニ、右所領ト日本國トノ間ノ經濟關係ガ今後益々進展シ、共存共榮ノ實ヲ擧ケムコトヲ希ヒ、相互主義ノ下ニ直接タルト間接タルトヲ問ハス、日本國ノ商工業、航海及各種企業ニ對シ、第三國ニ要求スル以上ノ過重條件ヲ決シテ課セサルヘキコトヲ、茲ニ均シク聲明スルノ光榮ヲ有ス。

余ハ以上ノ聲明ヲ和蘭國政府ノ名ニ於テ爲スヲ欣幸トスルト共ニ、之ニ因リテ永年間蘭日兩國間ニ存在スル善隣友好ノ誼ガ、愈々緊密ヲ加フヘキコトヲ確信ス。

第二章　會議前ノ空氣

會商前ノ蘭印側方策

日蘭會商ノ開カレルニ至ツタ原因ガ、昭和八年九月十三日公布ノ蘭印非常時輸入制限基礎法ニ基イテ發布サレタ諸制限令ニアルコトハ周知ノ事實デ、最初公布ノ洋灰輸入制限令ハ多少忍ヒ得ルトシテモ、又之ニ次テ實施サレタ麥酒輸入割當令ハ我方ノ濫賣其他ヲ顧ミル時、蘭印側ノミヲ攻擊スルノハ聊カ酷デアルガ、昭和九年二月公布ノ「サロン」輸入制限令、殊ニ翌三月實施ノ晒綿布輸入制限令ニ至ツテハ、在蘭印歐洲人商業組合ヘノ加入數如何ニ依ツテ輸入取扱數量ニ差等ヲ設クル極メテ嶄新ナモノデ、假令通商條約ノ規定ト正面衝突ハシナイニシテモ、常識ヲ以テ律シ得ヘカラサル不合理千萬ナ制度デ、事實本邦輸入商ヲ目標トスル差別待遇ニ外ナラヌコトハ、立案者タル經濟省長官「ウエレンスタイン」氏モ、亦彼ヲシテ斯クノ如キ奇矯ヲ敢テセシメタ蘭印政商モ、均シク之ヲ認メテノ上デ設ケタモノニ相違ナイ。然シ他面カラ見レハ對蘭印本邦輸出品ノ大宗タル綿布類カ年ト共ニ其輸入數量ヲ增加シタノハ別論トシテ、カノ輸入制限基礎法ノ實施以來本邦商品ノ極端ナ見越輸入ヲ見タカラ、蘭國政府ハ當時英國ニ滯在中ノ本邦綿業關係當業者ノ來蘭ヲ求メ意見ノ交換ヲ行ツタガ、何等議纏マラナカツタノデ、蘭國ハ兩政府間テ合議センコトヲ提議シ、今回ノ會商ト成ツタノデアル、即チ此會商ノ目標ハ和蘭本國トシテハ同國「ツエンテ」綿業ノ保護救濟ニ在ル、而シテ蘭印